

彼を愛し、温かく支援されたのも、むべなるかなである。抑圧と反動の時代に耐え、かずかずの戦争と恐慌とインフレーションの時代を生き抜いた、この尊敬すべき友の七十年の生涯に対して、深い敬意を表するものである。一九七九・三・一四

(前慶応義塾大学商学部教授)

## 寺田寅彦と

### その弟子たち

宇田道隆

1

今年(一九七八)は寺田寅彦先生(一八七八—一九三三)誕生百年になる。亡くなくなってもう四十三年、早いものである。以来毎年続いて弟子たちが銀杏落葉を踏んでその生誕日十一月二十八日の寅彦会に集い、今年(一九七八)は上野精養軒に令息(東一さん)、令嬢(関弥生さん)を迎えて先生を偲んだ。弟子たちも六十何歳から八十三歳(平均海面の山口生知博士)までの年配で二十名ぐらいに減ったが、先

生を憶うと何十年も昔にもどり、懐しく楽しい気持ちになる。

寺田先生は夏目漱石の熊本以来の英語・俳句・文学の筆頭弟子であり、漱石の親友の正岡子規からも直接俳諧を学ばれた。私どもは寺田先生の物理の弟子であるが、筆者は俳句の方も教えて頂いた。とにかくどの弟子も先生から学問と人生について色々得難い教えを頂いたことを今も感謝し続けている。

寺田先生と漱石、子規と相通ずるものはやはり多分にある。独創的な発想はもとより、自然と人間への熱烈な愛情が底に溢えられていて、真実を求め、不正と虚偽りを忌む点で共通していたように思われる。自由人としての考え方から脱俗の漂渺とした神仙の自在な境地を願望されるかにかがわられた。

お三人とも肉体的健康には恵まれなかったが、烈々たる精神力は共通し、むしろ病気がかえって精神の昂揚に役立ったようである。

2

子規は「墨汁一滴」、「病床六尺」など病床にありながら短歌・俳諧道を革新し、今日の基を築いた。漱石

は修善寺の大患を経て「則天去私」の心境に達し近代文学を開いた。

寅彦も若い時分病気休学、妻の死から「ホトトギス」に藪柑子集小品を載せ、大正九年大患後に冬彦的隨筆を盛んに書き、隨筆文学での第一人者となった。「好きなもの、薔、コーヒー、花、美人、ふところ手して宇宙見物」は寅彦の天国をのぞかせている。

弟子の中谷吉郎は雪水の研究で世界的盛名を得、隨筆家としても寅彦の衣鉢をつぐ者とされた。中谷は昭和七年頃病を得て伊豆伊東に二、三年療養中に「雑魚図譜」の名作を物し、その後「冬の華」を続々發表した。晩年幸田露伴の神仙道にひかれて熱心に研究し、隨筆にも書いた。「雪は天から送られた手紙である」中谷さんらしい発想の名句である。

「天災は忘れたころに来る」も、中谷さんがとりついで發表した寺田先生の遺句といわれる。中谷さんは俳諧を愛し、墨画を描き、虚雷と号して親友の魚太(数学の大家吉田洋一)らと連句を楽んだ。昭和三十七年六十二歳で亡くなる時家人に「人には親切にするものだよ」と遺

言したという。筆者は特にその親切を頂き、数々のお手紙と共に大学で

集号の巻頭に載った。寺田先生は昭和の初め既に航空研究所報告に流本

埼玉の大学長など学政にも腕を揮った。

(平均海面の山口生知博士)までの年配で二十名ぐらいに減ったが、先

など病床にありながら短歌・俳諧道を革新し、今日の基を築いた。漱石

年六十二歳で亡くなる時、家人に「人には親切にするものだよ」と遺

言したという。筆者は特にその親切を頂き、数々のお手紙と共に大学で二年先輩の中谷さんの思い出は深い。筆者が二度の出征中や戦後混乱の時期によく筆まめに慰め励まして下さった点は寺田先生そっくりだった。

藤原咲平先生は寺田先生の古い筆頭の高弟で、「お天気博士」で名高く、中央気象台長にもなられたが、寺田先生の講座をついで東大気象学教授を兼ね、筆者の先生でもあり、「海洋潮目の研究」で昭和十四年理博を頂いたときの主査は藤原先生だった。このテーマは寺田先生からで、ずっと指導を受けて来て、昭和九年「一年ぐらいでまとめて学位論文を出すように」と言われてやっている最中に寺田先生は死の床につかれた。

この潮目の問題が四十年後の全世界の海洋学界で取り上げられ、筆者の論文も見直されて、昨年はアメリカ地球物理学会シンポジウムに、本年はフランスでの国際海洋学委員会総会に招かれて講演、昨春召人として作った「金華山沖にしろけき潮筋にいろか群れ飛ぶ夕焼の海」が今秋アメリカ地球物理学会誌海洋前線特

集号の巻頭に載った。寺田先生は昭和の初め既に航空研究所報告に流体力学実験で「細胞的対流による潮すじ」(ラングミニニア・サーキュレーション)を見事に示されている。

藤原先生はお若い頃胸を病み、療養中から仏教と渦巻の研究に凝られ、「音の異常伝播の研究」で学士院賞を受けられた。藤原先生の次に気象庁長官、現在日本学士院々長の和達清夫さんも寺田門下で、気象台地震掛のころ肺を病み、三、四年も休養中寺田先生に慰められて元気をとりもどし、「深発地震の研究」で学士院賞も受けられた。病気がかえって和達さんに思いやり深いプラスを与えた摂理の深さを思わざるを得ない。和達さんの次の気象庁長官畠山久尚さん(地磁気の研究で学士院賞、雷や火災の科学でも貢献)、やはり同長官になった高橋浩一郎さん(量的天気・気候予報学の独創的研究開拓)も寺田先生の門下である。

藤岡由夫さんは中谷、和達と同級で、寺田門下として先輩の高嶺俊夫博士と共に原子物理、分光学で有名だが、坪井さんと寺田先生の音楽合奏お相手や映画批評を助け、山梨・

埼玉の大学長など学政にも腕を揮った。

寺田先生は地球物理でウェーゲナーの大陸移動説を早くから支持され、紹介もされていたが、近年先生の先見の明が立証された。その方では学士院賞を得た坪井忠二さんの重力、永田武さんの地球岩石磁気の研究、続いて力武常次さん(地球電磁)、竹内均さん(地球力学)、上田誠也さん(プレート・テクトニクス、アガッシー賞受賞)など寺田先生の研究の世界的発展を見せた。

地球の割目だけでなく生物の割目現象から生物物理学研究を進めたのは先生の愛弟子で最も嘱望された坪田森三さんである。その割れ目学は今や世界的な生物物理の重要文献である。水産物理では寺田、藤原両先生に続いて田内森三郎、岡田光世さんたちが貢献した。火花放電、ガス爆発では中谷、湯本清比古さんなど、熱電気、熱学では芝亀吉さん(太陽エネルギー利用研究)、筒井俊正さん、流体渦で玉野光男、田中信さん、火災論で金原寿郎、中田金市さん、農業物理の鈴木清太郎さん、科学史の矢島祐利さんなど数多いが省略する。(海洋学者)